

多動性・衝動性の高い発達障害児の対人関係の発達を促す 臨床心理学的援助に関する研究 ープログラムにおける児童の内的体験と他児への意識に関する検討ー

九州大学大学院	中 村 真 樹
九州大学大学院	小 澤 永 治
九州大学大学院	飛 永 佳 代
九州大学大学院	遠 矢 浩 一
九州大学大学院	針 塚 進

要 約

本研究では、多動性・衝動性の高い発達障害児を対象としたグループセラピーにおいて①他児への意識②被受容感③情動体験感について検討した。調査方法は、毎回のグループセラピーの後、上記の3点について質問紙を実施した。その結果、場面構造が明確である場合に他児への意識とグループにおける情動体験感、グループにおける被受容感のすべてが高まることが示された。さらに、他児への意識の高まりが快的な情動体験を促進することが示された。

【キー・ワード】 多動性・衝動性, 発達障害児, 他児への意識, 被受容感, 情動体験感

Abstract

In this study, 1.attitude toward other group member 2.emotional experience in group therapy 3.accepted feeling by other group member was discussed in the group therapy for the children with a strong tendency of hyperactivity and impulsivity. After every session, the questionnaire was conducted from three view points as discussed above. The results showed well-constructed situation facilitated all three view points. In addition, the results showed growing awareness toward other group member facilitated positive emotional experience.

【Key words】 hyperactivity, impulsivity, children has mild disabilities, group therapy, attitude toward others, accepted feeling, emotional experience

問 題

児童期は同年代の仲間との関係が重要性を増していく時期であり、お互いの共通性や類似性を確かめ合うことでより親密な仲間関係を築くことが重要な発達課題となる。しかしながら、近年、教育現場において集団適応に困難を生じる児童の存在が注目されている。

これらの児童が示す具体的な困難としては、授業場面における落ち着きのなさや、他児との直接的な

トラブルを起こしやすいことなどがあげられる。そして、このような困難を生じる理由のひとつとしては、多動性・衝動性の高さがあると考えられる。

多動性・衝動性の高さを有する児童にはAD/HD（注意欠陥/多動性障害）もしくはその傾向を示すものが含まれるが、「多動性・衝動性の高い児童」とはAD/HDのみを示すものではない。平林（2007）が述べているように、実際の臨床現場においては広汎性発達障害とAD/HDの両者が一人の児童に併存するケースが少なからず存在している。衝動性はAD/HDの診断基準の一つとして挙げられているが、アスペルガー障害や高機能広汎性発達障害にも多く見られる問題である（染木，2004）。2005年4月に施行された「発達障害支援法」において、AD/HD、LD、高機能自閉症が「発達障害」として定義されているように、これらは近接する障害であり、不器用さや多動性・衝動性の問題を共通して抱えていると考えられる。よって、本研究では発達障害児の対人関係に関する困難を多動性・衝動性という視点からとらえ、彼らの対人関係発達を促す援助について検討することとする。

発達障害児は社会性や学習、行動の発達において多彩な症状を示すが（萱村，2005）、中でも多動性・衝動性の高い児童については、社会的出来事に対する理由付けの難しさや（Milch-Reich et al. 1999）、対人関係上の失敗や成功を外的要因に帰属しやすく相手や状況に応じた行動をとることが難しいという特徴をもつため（Hoza et al. 2000）、他者との関係性構築に困難を示すと言われている。彼らは他児への関心は高いものの「突然話しかける」「身体にさわる」など他児に対して不適切なかわり方をするため、他児とのトラブルを経験しやすい。周囲から「わがまま」と受け取られることも多く、他児に認められ受け入れられる体験が極めて乏しいとされる。パークレー（2003）は、繰り返される失敗体験は彼らの自己評価を低め、集団活動自体に苦手意識を持つ場合も多いと述べている。児童期の対人関係における成功体験は柔軟な対人交渉方略や（中田・塩見，2002）友人に対する自己開示と関連があるとされている（松島・塩見，2003）。以上のことから、児童期においては仲間と安定した関係を築くことが非常に重要であると考えられるため、同年代の他児との適切なかかわり方を伝えることや、他児に自己表現を行い受け入れられる体験を提供することが極めて重要であろう。また、発達障害児は相互的な人間関係やコミュニケーションに質的な障害があるが、多動性・衝動性の高さを有する場合は特に自分自身の行動や感情を振り返ることが難しい。他児とのかかわりを通して自分自身を振り返ることや同年代の仲間の中で役割をとる中で自己の新しい側面に気付いていくことは、児童期における対人関係の発達にとって非常に重要であると考えられるため、そのような体験についても支援していく必要があると考えられる。

このような体験を促す方法の一つとして、グループセラピーがあげられる。遠矢（2006）は、グループセラピーの利点として、友人関係の体験が自然な形でなされることや、療育プログラムに役割交代等の社会的スキルを組み込むことが可能であること、プログラムの持つ遊び性がグループ活動参加への児童の動機付けを高めることをあげている。その他に発達障害に対してグループという形態で支援を行ったものとしては、渡邊（2002）があり、心理劇を適用することで仲間意識の高まりをねらっている。また、高原（1993，1995，1997，1998，1999，2001，2007）は知的障害者や自閉症者を対象に心理劇を行い、感情表出や自発性が促進されたと報告している。

以上のように、グループセラピーや心理劇は、対人関係に困難を示す発達障害児にとって有効な支

援の方法であると考えられる。よって、本研究では、同年代の仲間から認められること、仲間に対して自己表現をすること、児童がお互いを認め合う中で他児への関心を育てていくことを目的としてグループセラピーを行った。

本研究では、「グループ活動に伴う情動的体験」を情動体験感、「グループ活動を通して他者から受け入れられた感覚」を被受容感と定義し、毎回のセッション後に児童に対して実施した振り返りアンケートを通して測定した。児童に対してアンケートを実施したのは、児童の主観的評価をグループ活動に生かしていくことが重要であると考えたからである。また、アンケートを実施することにより、児童に自己の感情や行動を振り返ることを促すという目的もあった。以上より、児童の情動体験感と被受容感の変化とグループ過程の関連から、有効なグループセラピーのあり方を検討することを本研究の目的とした。また、他児への意識についても合わせて検討を行った。

方 法

1. グループの概要

(1) **対象児**：多動性・衝動性の高さによる対人関係困難を主訴とする児童 6 名であった。診断名は AD/HD2 名、アスペルガー障害 1 名、広汎性発達障害 1 名、非言語性 LD1 名であった。

生活年齢は 8 歳から 12 歳で知的発達水準は平均以上であり、全児童が小学校では通常学級に在籍していた。対象児については表 1 に示す。

表 1 対象児の概要

人数	年齢			IQ	
	範囲	平均	SD	平均	SD
6	8:9~11:7	10	13.5	96	19

(2) **グループセラピーの目的**：①ルール性のある活動を行う中で他者に受け入れられやすい方法で他者とかかわり、協力する体験ができるよう援助すること

②心理劇的活動を行う中で、他者に受け入れられ、認められる体験を援助すること

(3) 構造

①**人的枠組み**：対象児童 1 名につき中心的なセラピーの舵取りを行うメインセラピストと補助的役割を取るコセラピストの 2 名がセラピストとして担当した。グループリーダー 1 名が場面を進行し、グループ全体をサポートするグループサポーター 1～2 名がリーダーを補助した。

②**時間的枠組み**：隔週平日の午前中 1 時間のグループセラピーであった。セラピー 50 分、活動の振り返り時間 10 分とし、この 10 分間でグループプログラム及び他児への意識についての質問紙を実施した。なお、プログラムは毎回ウォーミングアップ（プログラム①）メインプログラム（プログラム②）の 2 種類の活動を行った。

(4) 質問紙：各プログラムへの参加意欲について「プログラムが楽しかった」、他児への意識について「〇〇（他児の氏名）と仲良く遊べた」という質問項目を設けた。これを「他児への意識得点」とする。「グループにおける被受容感」と「グループにおける情動体験感」に関する質問項目を表 2 に示す。

表 2 質問項目

項目
Q1 みんなに注目された
Q2 自分の話を聞いてもらえた
Q3 安心して参加できた
Q4 わくわくする感じがした
Q5 いらいらする感じがした(反転)
Q6 おちついた感じがした
Q7 かなしい気持ちになった(反転)

質問項目 1 から 3 が「グループにおける被受容感」であり、質問項目 4 から 7 が「グループにおける情動体験感」である。回答方法は 4 件法とし、「とても、まあまあ、ふつう、あまり」から一つ選択してもらい、それぞれ 4 点、3 点、2 点、1 点を与え得点化した。それぞれの選択肢には、子どもが回答しやすいよう表情図をつけた。回答欄の例を図 1 に示す。

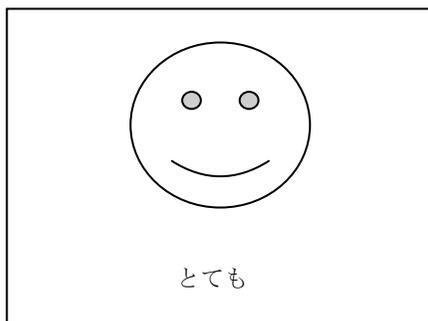


図 1 回答欄の例

(5) プログラムの内容

プログラムは、「自己表現を促すプログラム」と「他児との協力を促すプログラム」を行った。プログラムの概要については、表 3 に示す。

2. 期間

本研究の対象期間は、児童に対してアンケートを実施した X 年 9 月～X+1 年 3 月の全 7 セッションである。

表3 プログラムの概要

セッション	プログラム	プログラムの概要	ねらい
9	立体すごろく	子ども2名1組になり、サイコロを振り、升目にかかれたお題（例：二人三脚）を2人で協力してクリアする。	協力
10	風船運び	子ども2名1組でペアになり、手を使わずに2人で協力して風船をゴールまで運ぶ。	協力
11	ジェスチャーゲーム	子どもごとに「冬休みにしたいこと」をジェスチャーで表現してもらおう。台詞もありとする。	自己表現
12	じゃんけんリレー	子ども対大人でチーム分け。じゃんけんコースの両端にそれぞれのチームから1名位置につく。じゃんけんをして勝てばそのまま、負けた人はスタート地点に戻る。	協力
13	転がしキャッチボール	子どもは全員選手になり、輪になってボールを転がしあう。必ず1人3回はボールに触るようにする。真ん中にある鬼（大人）にボールをとられないよう、合図を出し合って行う。	協力
14	鬼をやっつけろ	節分にちなんだプログラム。子どもが2名1組でペアになる。起き上がりこぼしになっている鬼が倒れるよう、2人で協力して玉を当てる。	協力
15	ジェスチャーゲーム	「この1年で一番うれしかったこと」を振り返り、皆の前で発表する	自己表現
16	寄せ書き	1年間ともに過ごしたメンバーとメッセージを交換し合う。	その他

結果と考察

1. グループの経過

#9から#16におけるプログラムへの参加意欲を図2に示す。他児への意識、グループにおける被受容感、グループにおける情動体験感については図3に示す。なお、#12は参加人数が2名であったため分析対象から除外した。

プログラムへの参加意欲の平均点は、プログラム①とプログラム②でそれぞれ3.09、3.31であった。他児への意識、グループにおける被受容感、グループにおける情動体験感の平均点はそれぞれ2.67、2.75、3.32であった。グループの経過によって点数が高まっているという結果ではなく、セッション回数以外の要因が関係していると考えられた。

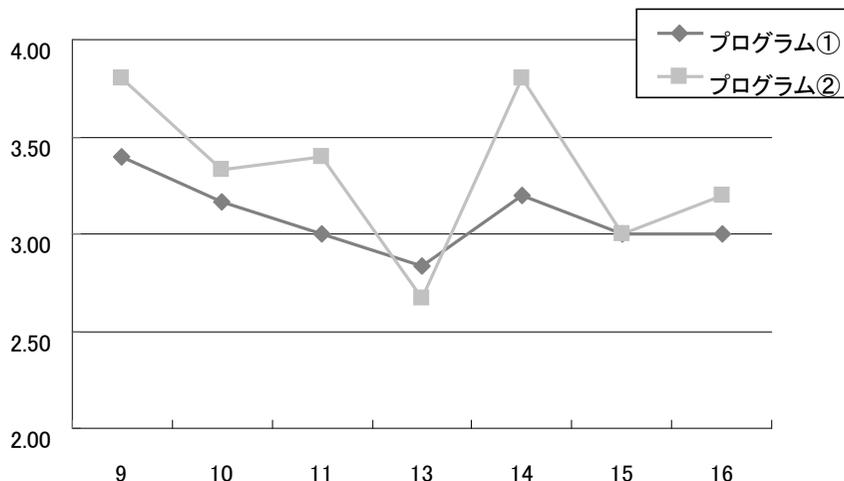


図2 プログラムへの参加意欲

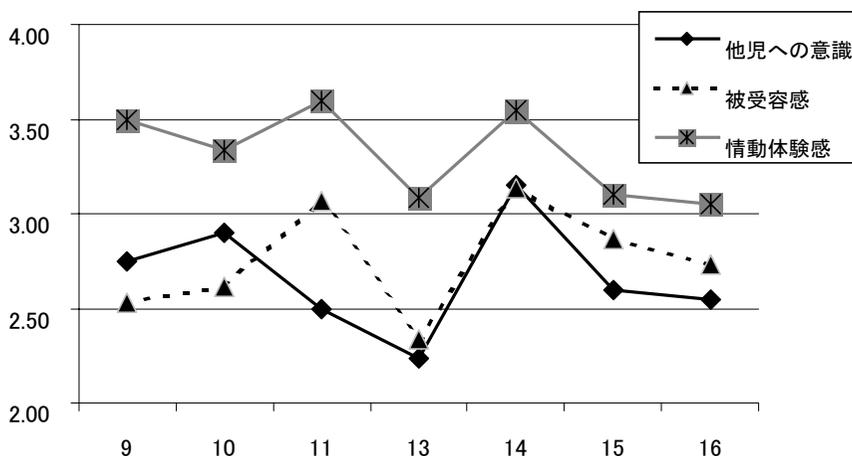


図3 他児への意識・被受容感・情動体験感

2. 各質問内容に関する検討

以下に(1)他児への意識 (2)被受容感 (3)情動体験感についてそれぞれ検討する。

(1) 他児への意識

他児への意識得点は、#9、#10、#14 で高くなっていた。これらのセッションの共通点としては、ルール性のある活動の中で他児との協力をねらったプログラムを実施している点であった。これらのセッションでは児童2名1組でペアになって活動を行い、児童がお互いに話し合いながら協力をする姿が見られた。例えば、#14の「鬼をやっつける」では、鬼の起き上がりこぼしを倒すために玉を投げるタイミングを合わせる声かけをしたり、玉のスピードや玉を当てる位置を話し合う姿が見られた。このように1対1でかかわる場面を設けた場合、特定の他児とじっくり向かい合うことが可能になり、

他児への意識が高まる可能性があると考えられる。

(2) 被受容感

被受容感は#11と#14で高くなっていた。#11は、「冬休みにしたいこと」をテーマとした心理劇であった。このセッションでは「友達を誘ってサッカーをする場面」や「宝くじを買う場面」などグループの前で児童の様々な希望が表現された。さらに、表現された内容について他児から質問や感想が述べられ、児童間の共通点が発見されたり、演じた児童に再度注目が集まった。以上のように、#11では児童が心理劇という守られた枠の中で自己表現をし、受け入れられる体験をしたと考えられる。

#14は、2人1組で協力して鬼の起き上がりこぼしを倒すプログラムであり、鬼を倒すという目標が明確であった。児童は鬼を倒したことによって達成感を感じ、また鬼を倒した瞬間に他児から拍手をされるなど、注目されたことが実感しやすいプログラムであったと考えられた。また、#11と#14の共通点として活動を見る人で行う人が明確であったことがあげられる。

一方で#13は被受容感が低かった。#13の「転がしキャッチボール」は、プログラムの目的としては#14と同様に協力をねらったプログラムであった。しかし、参加児童全員が必ずボールに触るという制限を設け、グループ全体で目的を達成するプログラムであったため、一人一人が注目される感じが少なかったものと考えられる。

このように被受容感については、心理劇のように自己表現が保障されている場面構造や「注目されている」ということが分かりやすい場面構造と関係していることが示された。

(3) 情動体験感

情動体験感は#9、#10、#11、#14で高かった。#9、#10、#14は2人1組で行うプログラムであり、ジェスチャー等のお題を表現する、風船をゴールまで運ぶ、鬼を倒すというそれぞれ明確な目標が設けられていた。児童は、明確な目標に向かって相手と話し合いをして工夫を出し合い、目標を達成し、周囲からその場で称賛を受けたことから達成感が得られたと考えられる。目標を達成したことは児童にとっての成功体験となり、「わくわく感」や「落ち着いた感じ」につながったと考えられる。#11の情動体験感の高さは、児童にとってイメージしやすく実際にはできていないがやりたいと望んでいることを、心理劇という「現実近く、自己表現が保障された場」でいきいきと体験できたことによるものであると考えられる。

一方、同じ心理劇でも#15においては情動体験感が低かった。これは児童にとって経験を振り返ることの難しさ、「出来るようになったこと」など肯定的な自己認知の難しさがあり、「1年で一番嬉しかったこと」というテーマについてイメージを深めることが難しかったと考えられる。

以上のことから、情動体験感には目標が明確で達成感を感じやすい場面構造と関係していることが示された。また、他児への意識と情動体験感とはほぼ同じセッションで高まっており、他児への意識の高まりが児童の快適な情動体験を促進することが示された。

(4) プログラムとの関連

プログラムとの関連で被受容感と情動体験感について考察すると、心理劇においては「みんなに注目された」という体験をやすく、被受容感が高まったと考えられる。一方で、ルール性のある活動では「わくわくする感じがした」などポジティブな情動体験が高まったと考えられる。心理劇的活動の中で、被受容感が高まり、ルール性の高い活動で他児と話し合い協力する場面を設定することで、より生き生きとした対人交流を促すことができると考えられた。以上のことから被受容感と情動体験感という2つの視点からグループプログラムを検討することの重要性が示された。

まとめと今後の課題

本研究では、多動性・衝動性の高い発達障害児を対象としたグループセラピーにおいて①他児への意識②被受容感③情動体験感について検討した。その結果、場面構造が明確である場合に他児への意識とグループにおける情動体験感、グループにおける被受容感のすべてが高まることが示された。さらに、他児への意識の高まりが快的な情動体験を促進することが示された。このように、他児への意識、グループにおける被受容感とグループにおける情動体験感は相互に関係し合っていることが示された。場面構造の明確さはそれぞれのプログラムの目標と児童の特徴の理解の上に成り立つものであるため、リーダーとセラピストが話し合いながら、プログラムの内容や場面の設定の仕方について詳細に検討していくことの重要性が示された。

本研究では、対象児童一人一人がグループにおいて被受容感や情動体験感を得られることに重点をおいた結果、対象児童がグループという場やグループの仲間に対して安心感や信頼感を感じることができるようになったと考えられる。今後の課題としては対象児童一人一人がグループに対する安心感や信頼感を基盤にし、被受容感、情動体験感を得られることに加え、お互いに意識や理解を深め合いながら、仲間と協力する活動の中で達成感を持つことを援助していくことが重要である。

文 献

- 萱村俊哉・白瀧貞昭・沖田善光・杉浦敏文 (2005) ADHD 児における身体図式と実行機能の連関。財団法人 明治安田こころの健康財団研究助成論文集, (41), 10-18.
- 平林伸一 (2007) DAMP 症候群と軽度発達障害。現代のエスプリ (474) スペクトラムとしての軽度発達障害 I. 80-88.
- Hoza, B., Waschbusch, D.A., Pelham, W.E., Molina, B.S.G., & Milich, R. 2000 Attention-Deficit/Hyperactivity Disorder and Control Boy's Responses to Social Success and Failure. *Child Development*, 71 (2), 432-446.
- Milch-Reich, S., Campbell, S.B., Pelham, W.E., Connelly, L.M., & Gava, D. 1999 Developmental and Individual Differences in Children's On-Line Representations of Dynamic Social Events. *Child Development*, 70 (2), 413-431.

- 松島るみ・塩見邦雄（2003）対人的自己効力感が自己開示に及ぼす影響について．日本発達心理学会 第14回大会発表論文集，404.
- 中田栄・塩見邦夫（2002）子どもの対人相互作用過程におけるストラテジーの質的変容—対人交渉場面におけるメッセージ伝達方略の発達的变化—日本心理学会第66回大会発表論文集，1025.
- ラッセル・A・バークレー（2003）ADHDの理論と診断—過去，現在，未来．発達障害研究，24（4），357-376.
- 染木史緒・本山優子（2004）軽度発達障害児に指導効果を般化・定着させる試み—衝動性のコントロールを中心に—．財団法人 明治安田こころの健康財団研究助成論文集，（40），8-15.
- 高原朗子 1993 自閉性障害者に対する心理劇治療の試み 心理劇研究 第16巻1-7
- 高原朗子 1995 自閉性障害者に対する心理劇 —感情表出の促進を目指して— 心理劇研究第19巻（1号）1-8
- 高原朗子 1997 知的障害者に対する心理劇—イメージを喚起するウォーミングアップを導入して— 心理劇研究 第21巻（1号）16-26
- 高原朗子 1998 自閉性障害児・者に対する心理劇 —2泊3日の林間学校を通して— 心理劇研究 第21巻（2号）1-12
- 高原朗子 1999 知的障害者の自発性を高める心理劇的働きかけ —ダウン症児と自閉症児に対する適用— 心理劇研究 第23巻（1号）22-31
- 高原朗子 2001 青年期の高機能自閉症者に対する心理劇 心理臨床学研究第19巻（3号）254-265
- 高原朗子 2007 発達障害のための心理劇—想から現に— 九州大学出版会
- 渡邊須美子 2002 自閉性障害者に対する仲間体験の場としての心理劇の試み—他者との関わりが希薄な事例を中心に— 心理劇研究第26巻（6号）16-26

付 記

本論文の作成にあたり，こころよくご協力いただきました児童と保護者の皆様に心より御礼申し上げます。

